



古都・奈良

# 世界遺産を巡る

数多くの建造物と仏像を生み出した白鳳・天平文化は大輪の花を今に伝える。

儀式や行事を伝える姿は昔のまま。

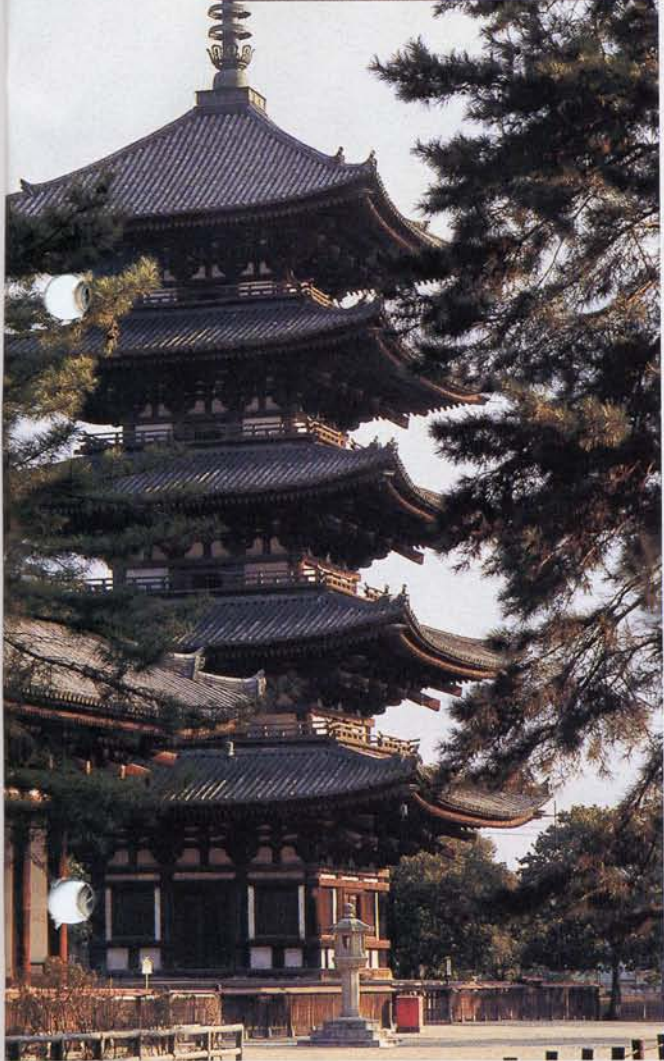
「古都奈良の文化財」である合わせて8つの社寺、遺跡が  
法隆寺に次いで昨年12月、ユネスコの世界遺産に登録された。

廃墟や史跡だけになってしまった数多い遺産のなかでは奈良は特別な存在。

建造物は今も人の血が通い呼吸を続けている。

文/中田紀子 写真/樋口英夫

異国的なたたずまいの、  
興福寺中金堂。興福寺  
は藤原氏の氏寺として  
権勢を誇っていた



# 春日大社

(右)  
春日大社中門と東御廊の釣り灯籠。境内や建物に配された灯籠の数は約3000基。2月と8月に催される「春日大社万灯籠」では灯籠すべてに火がともる(上)。境内の巨大なクスノキは神木として祀られている



## 廃仏毀釈の荒波を越えた 五重塔は今も建ち続ける

明治の廃仏毀釈の嵐が吹いた時、日本で二番目という高さ約50メートルの五重塔は50円で売りに出されたとも、また焼いて金具を採ったという物騒な話もあったというが、無事にその危機を乗り越えた。

興福寺の境内は土塀や垣根で仕切られることなく、五重塔を見たいと思えばその下へ、金堂が見たいれば金堂のそばへ、人は自由に境内を歩き来する。訪れるすべての人を信頼した、この解放感がとてもうれしい。

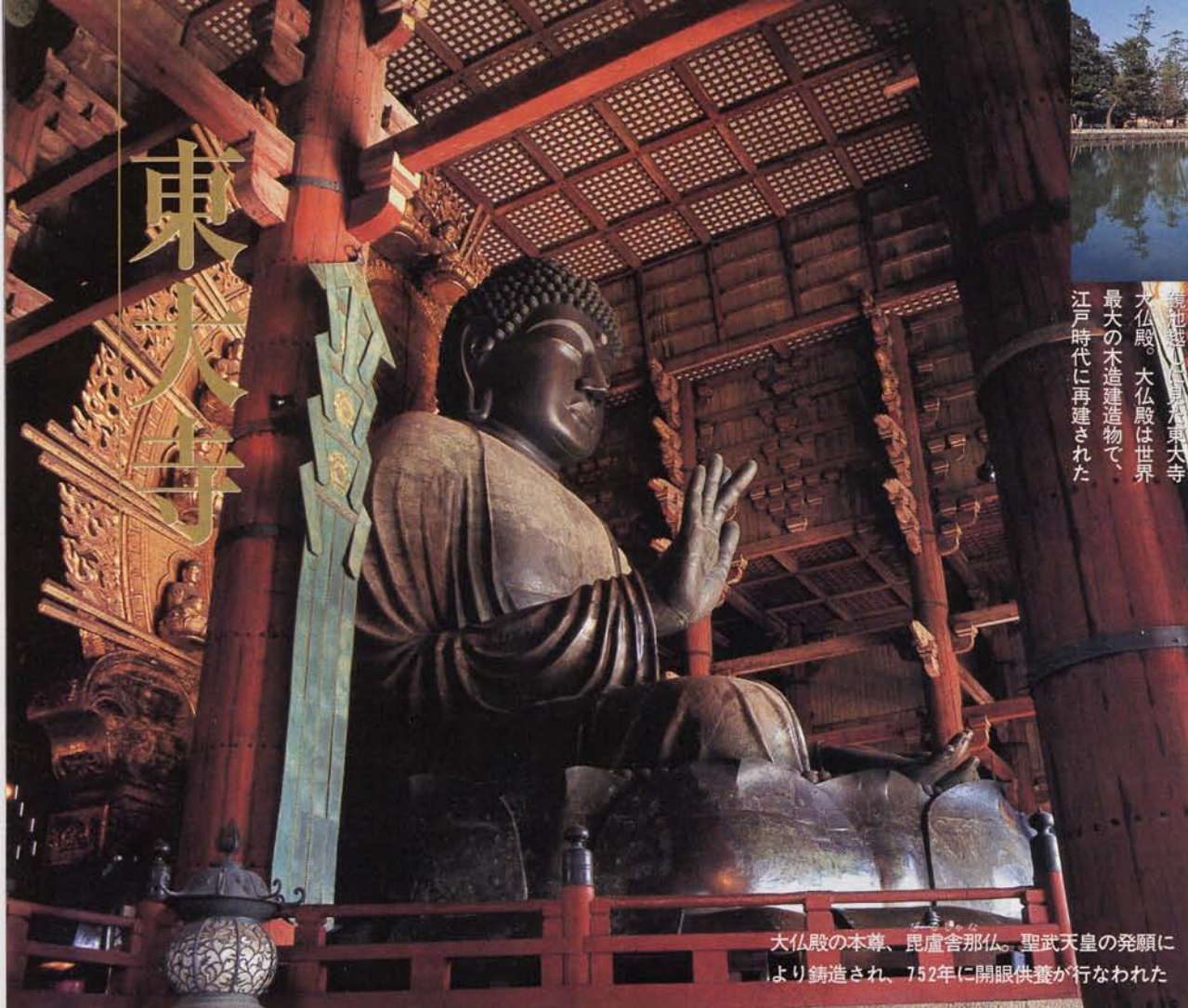
藤原氏の氏寺として権勢を振るった興福寺、多くの僧兵を擁し各地の寺へ押しかけている。国宝館にある白鳳時代の名作といわれる仏頭は今、飛鳥の土の下に眠る山田寺の本尊だったが、文治3年(1187年)に僧兵が持ち帰ったもの。

「はるきぬと いまか もろびと ゆきかへり ほとけの にはに は なさく らしも」と歌人会津八一が歌う興福寺の境内。

爛漫と咲く八重桜は、聖武天皇が三笠山の山奥から移植したのが始まりで、今咲く八重桜は東大寺の知足院の流れを引くもの。

桜の花の終わった後、藤の花が奈

# 東大寺



鏡池越しに見る東大寺  
大仏殿。大仏殿は世界  
最大の木造建造物で、  
江戸時代に再建された

# 興福寺

興福寺五重塔。高さ52メートルは京都の東寺に次ぐ日本で二番目のもの

大仏殿の本尊、毘盧舎那仏。聖武天皇の発願により鑄造され、752年に開眼供養が行なわれた



「お水取り」の行事で知られる東大寺二月堂の裏参道は、しっとりとした静けが漂っている

興福寺東金堂内の薬師如来像（左）と日光菩薩像（右）。日光、月光両菩薩を脇仏とする薬師如来は病苦から衆生を救う



良公園のあちらこちらで見られるのも春のいざないのひとつ。

**春日大社**の砂ずりの藤は、神殿に舞う巫女の長いさげ髪に似て、藤棚から地に擦るほどに重く垂れ下がる。この春日大社も藤原氏の氏神であった。

本殿は直会殿の奥の白砂の向こうの小高くなった丘の上であり四神を祀る。華やかな春日造りの神殿は、神様が居られるにふさわしい造り。

春日大社の摂社、若宮神社は御蓋山の麓。御間型燈籠という最古の石燈籠の並ぶ御間道の先にある。

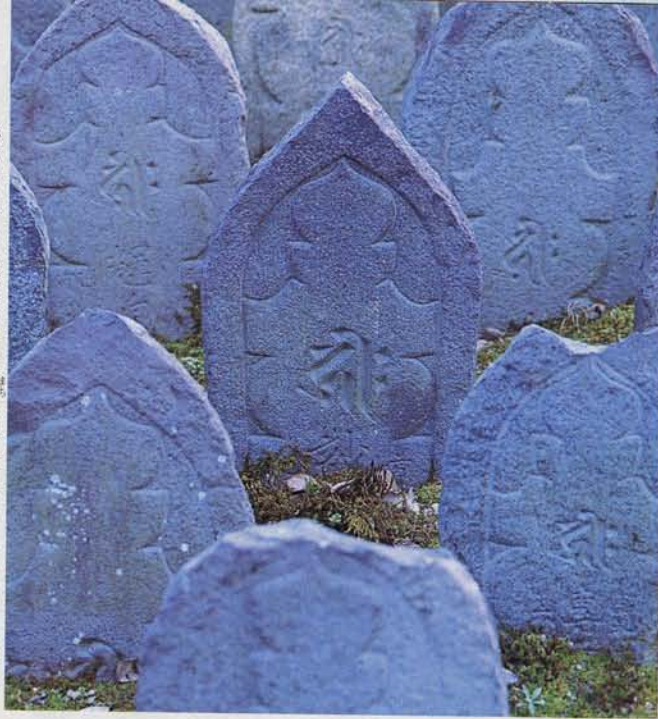
若宮の巫女は藤のかんざしをさし、清浄無垢を表す八重の紅白の重ね着の衣装で神の前にお仕えする。神楽舞台の部を跳ね上げ、居並ぶ神官の前に奉納される巫女の舞は、無形の文化遺産だと、威儀を正し受け止めたいもの。

天平文化は構想の大きさ、行動力ではとてつもない力を発揮した。

その一つが、天平勝宝4年（752年）に大仏の開眼供養が営まれた世界最大の木造建築、東大寺の大仏殿である。治承と、永祿の二度にわたる兵火で創建当時の金堂は失われてしまった。いまは正面の幅が半分位になってしまったけれど、世界一にはかわりはない。

# 元興寺

昔のたすまいが残る奈良町に元興寺はある。かつては奈良町全体を境内にしたが、いまは石仏が建ち並ぶ小さな境内



# 薬師寺

奈良時代に建てられた薬師寺金堂は、室町時代に焼失し、昭和になって復元された



元興寺本堂の屋根瓦は、飛鳥時代に百済から渡来した職人によって焼かれたもの。赤色の瓦は日本最古のものという

## 再興、維持、衰退と 三つの道を歩んだ寺の姿

迷路のような小路に並ぶ町家は奥行きが深く間口の狭い中二階作り、商いの町であったという面影を残す奈良町。町は元興寺の旧境内の一带を中心に、江戸時代の末期から明治の初期にかけて発展した。

軒の先々に赤い布で作った柏餅みみたいな身代わり申が可愛らしく幾重にもつながってぶら下がっている。元興寺もかつては南都七大寺の一つとして権勢を振るっていた。

奈良時代特有の上の方が細くなった丸瓦を並べる行基葺きの瓦の持つリズムと本堂と禅室に形を変えた極楽坊がこの寺の特徴。衰退してからもかろうじて残っていた五重塔や観音堂も江戸の末期、安政6年（1859年）に焼失する。元林院、中院、北室、納院、公納堂などの町名に名を残すだけになってしまった。

薬師寺は聖武天皇が皇后（後の持統天皇）の病の平癒を願って藤原京にあった寺を、今の地に移したのだという。病を治すために寺を平城京までもってきた愛の大きさは、妻に尽くせる最大の誠意だった。

「凍れる天平の音楽」と称賛された天女が笛を吹く水煙を塔の上にいた

金堂の裏手の境内に新たに建てられた玄奘三蔵院。玄奘の遺骨が納められている



薬師寺は同じ境内に二つの塔を持つ珍しい伽藍配置になっている。色鮮やかな西塔は一見六重に見えるが三重の塔だ



# 唐招提寺



唐から招かれた鑑真和上の開山とされる唐招提寺。金堂は中央が膨らんだ柱をそなえ、簡素で優雅な印象をあたえる

金堂の中には千手観音、毘盧舎那仏、薬師如来など、奈良時代に造られた国宝の仏像が安置されている



だき、各層に裳階をめぐらし、六層に見える東側の三重塔は度重なる台風や地震などに耐えてきた。自然体で古色をさらしながらも、再建されたまばゆい西塔と対面する。

改修なった金堂には端然と中央に座す薬師如来、左右に月光菩薩と日光菩薩を脇仏として三者が一体となっている。わずかに腰をひねる日光、月光菩薩に妖艶さを感じるのは、菩薩も美しい円熟した女人かと不遜にも思ったけれど、私もまた俗人の目しか持ち合わせていなかった。

ほぼ、同じところでありながら唐招提寺は薬師寺と違った雰囲気を持っている。

古代ギリシャの建築を見た、ある作家は唐招提寺にその共通性を唱えた。その半面うつろわぬ美がそこにあると。金堂の前に立ち並ぶ円柱が、光と影の競演を演出する。そっと、まるい柱に手を添え、自分が時代のヒロインでこの場所が自分にふさわしいと自賛するの面白い。

鑑真が唐から渡来して奈良の都に仏教の戒律をもたらした。その足跡は天平の文化に大きな功績を残す。

天平の建物、大海原の香りのする講堂の瓦葺きの屋根は雄大に天空にせり上がる。棟の両端の鴟尾は中空ににらみをきかせていた。

# 平城宮跡

唐の長安をモデルにして建設された平城京は、8世紀の約70年間、日本の中心として栄えた。昨年その跡地に朱雀門が復元された



発掘調査と建物の復元作業が行なわれているが、礎石をふくめほとんどすべての建造物は、平安京遷都のときに再利用され運び去られている

昨年復元された東院庭園。朱に塗られた建物と池の白い玉石のコントラストが天平の優雅さをかもしだしている



**残さなければならぬ遺産もタイミングが必要**

日本の政治の中心、皇居と霞が関が同居したような核が地中に眠っている。その広さは約120ヘクタール。大極殿、朝堂院、天皇のお住まいである内裏がここにあった。

「みはるかす 古き都の 野の果てに 人ありて うつ 鞆のかがやき」と昭和の初期に会津八一は歌っている。都が平安京に移ってから長期間放置され、いつの間にか内裏のあった所も田畑に様変わりをしていったとは信じられないこと。

私財をなげうち宮跡の保存に尽くした柵田嘉十郎という人がいなかったら、今もここに鉄を振る人を見たかも知れない。発掘調査が始まったのは40年前。でも、この調査は遅きに失した。悲劇の長屋王の邸宅の跡は百貨店になったのは取り返しのつかない残念なこと。

今、かつて主要な建造物があつたところに1200年前の姿を再現しようとの試みが行われている。朱雀門が復元された。瀟洒で華麗な朱塗りの柱の門というより大きな建物。東院庭園も往時の姿を取り戻した。池を取り入れたさわやかな作りの庭園、この池の水辺で高貴な人々によ

# 法隆寺



回廊の柱は中央が膨らんでおり、五重塔や金堂とともに世界最古の木造建造物



金堂の屋根部分に飾られた竜の彫刻。室内には聖徳太子のために造られた釈迦三尊像などがある

日本最初の世界遺産に指定された法隆寺の伽藍。五重塔は日本最古のもの

金剛力士像（3ページの写真）が目をひく中門の前を右に曲がり、土塀のある静かな道をたどると、夢殿に着く



観音の化身ともされる聖徳太子をしのんで建てられた夢殿。八角円堂の中央に太子と等身大の秘仏救世観音が置かれている



る宴が開かれたのだろう。世界遺産の指定は復元されたものではなく、地中の遺構がその対象になっている。天平時代をさらにさかのぼる飛鳥時代に仏教寺院として建造されたのが法隆寺。

法隆寺地域の仏教建造物が世界遺産に登録されたのは平成5年。1300年前の姿を損することなく、そのままに残している。

飛鳥の様式美を伝える金堂と五重塔の内陣は意外と狭い。金堂には釈迦三尊、葉師如来像、阿弥陀如来像が座している。五重塔の内陣は更に狭く、ここに須弥山を築き、修業するおびただし数のやせこけた弟子たちが納まっている。釈迦の入寂を嘆く弟子たちの表情は様々。そのリアルな姿には西洋の彫刻をもしのぐ迫力があつた。

この法隆寺には流浪の観音様といわれた百済観音に新居が出来た。大宝蔵殿がそれ。飛鳥を代表する立派な仏様なのにその出所ははっきりとしていない。身長208センチのすらりとした体形、アーモンド型のつぶらな瞳。かすかに微笑むやさしい姿に安堵の気持ちを覚えるのはいつものこと。

この飛鳥美人にいつでも会えると思うと心が弾む。

# 春日山原始林



若草山の山頂から見た春日山原始林の夜明け。右側の小さなピークは春日大社の聖域になる。ふもとには奈良市街が見える



春日大社の背後にひととき深い森が見える。1千年以上にわたって伐採を禁じてきたため、今では貴重な原始林の姿をとどめている

## 精霊が守ってきた原始林、四季折々の色がある

奈良に降り立った時、真っ先に目に飛び込んでくるのが若草山とそれに連なる春日山原始林のなだらかな稜線。奈良市の東にあり、町とは背中合わせ。この中に足を踏み入れた時、深林に騒音はかき消され、まるで別世界のように。

春日山は昔から春日神社の神聖な領域として伐採が禁じられてきた。

この春日山原始林は16世紀ごろ数度に及ぶ台風の被害を受けた。壊滅的な被害を救うため、豊臣秀吉が約1万本の杉を植栽したり在来種によ

る補植をした経緯がある。

原始林内に点在する春日杉は直径1メートル以上の樹齢250年から400年のもの。最大の杉は樹齢1000年以上と推定される直径4メートルを越えるものがある。周囲は5、6人が手をつながないと届かない。

春には新緑の若葉、木の間から薄紫の藤の花が滝のように流れ、秋には紅葉が紅の傘を広げる。都市に近いにもかかわらず原始性を保つていることから、昭和30年に特別天然記念物の指定を受けている。が、この中を誰もが歩くことができる。

春日奥山を巡る自動車道もあるが車で回遊するより、やはりここは歩いて散策するのが爽快だ。ちよつと横道にそれると、鶯の滝や歓喜天を祀る祠があったり、地獄谷石仏群に会える楽しみがある。

運がよければ天然記念物のルーミスジミ蝶を見ることがもできる。

